

第3回 OR セミナー 「実用 OR 入門セミナー」を受講して

赤澤 武雄 (南山大学)

今回のセミナーにおいて、一番興味を持って取り組んだのがケーススタディに関するものであった。参加者のみなさんは多種多様な職業の方たちで、実際にされている仕事内容も OR を専門にされている方は少なかったと思う。しかし、そういったメンバーが、その場で知り合った全く共通点のないグループに分けられて、同じ条件の下で同じ問題に取り組んだ。そのため、各グループの問題に対するアプローチも違って、社会人の方々は企業で実際に行われている手法を使ったり、セミナーで習った方法を取り入れたり、セミナーということを忘れてしまうぐらい熱心に問題解決に力を注がれていた。その中で自分は大学で OR を勉強している手前、何としても自分の専門に関しては最良解を求めようと必死になっていた。

ケーススタディは二日に分かれており、一日目で中間報告があった。各グループの途中経過を聞いた参加者のみなさんは、各自で予習し自分なりの考え方をまとめてきて、それをもとにさらに自分たちの結果を検討するといったことを誰に言われるでもなく行っていた。もちろん自分も一日目のその夜、自分の考えをまとめたり、問題に対する定式化を考えていた。自分のグループで一緒になった方も同様で、中には自分の家族にも意見を求めていた例もあった。問題に対する姿勢はどのグループの方々も変わりなく、自分のグループが一番良い結果を求めようと躍起になっていた。そんな姿勢は年齢や職業、立場など関係なく表われており、みんなの一つの事に頑張っており、みんなで一つの事に頑張っており、みんなで一つの事に頑張っており、みんなで一つの事に頑張っているようでもあった。実感できたのは学生の自分はいつも机に向かってゴリゴリ勉強していることが、必ずしも OR を理解することではないということである。なぜなら、あれほど様々な参加者が集まってその中で適当に選ばれたグループでさえ、最適な解ではないにしても、問題に対する何らかの解が求められたことは、OR の手法は誰にでも手軽に利用できることを意味するのでは

ないのだろうか。

実際、自分がグループの中で得意な部分を担当し、自分の専門でない知識を他のメンバーの方がカバーすることで、より良い答に近づけるのではないだろうか？ さらに同じ分野の知識を持つ方はその考えをさらに煮詰めていくことができる。つまり、ある程度の OR の知識を持った上で、様々な分野の人間が議論することによって問題の本質に近づき、より良い解決策が得られるのではないのかと実感した。今回のセミナーでは OR に関する知識を勉強できただけでなく、自分とは違った場所で働かれていますと一緒になって同じ問題に取り組むことができたことが、貴重な体験となった。

最後に、社会人の方々や学生がセミナーに参加して意見交換することにより、学生は社会でどのように OR が生かされるのか、また社会人の方は学生が OR を用いてどのような問題に取り組んでいるのか、といったことを十分に理解し、そして、お互いに OR の知識を分かち合えるだろうことを実感することができた。このことが今後のセミナーで今まで以上に実現されることを願っている。

注) さる 10 月から 11 月にかけて、延べ 4 日間にわたり第 3 回 OR セミナーが開催された。その内容大略を下記に示す (詳細は学会誌 平成 12 年 9 月号の綴じ込み参照)。

初日と 2 日目

「Excel ソルバーと最適化」, 「AHP (階層分析法)」, 「ケーススタディの課題説明」, 「コンジョイント分析」, 「DEA (包絡分析法)」

3 日目と 4 日目

「モデルベースプランニング」, 「ケーススタディのグループ討議」, 「シミュレーション」, 「ケーススタディの中間発表」, 「最終発表準備」